自転車日記

夏目漱石

西暦一千九百二年秋忘月忘日白旗を寝室の窓に翻(ひるが)えして下宿の婆さんに降を乞うや否や、婆さんは二十貫目の体軀(たいく)を三階の天辺(てっぺん)まで運び上げにかかる、運び上げるというべきを上げにかかると申すは手間のかかるを形容せんためなり、階段を上ること無慮(むりょ)四十二級、途中にて休憩する事前後二回、時を費す事三分五セコンドの後この偉大なる婆さんの得意なるべき顔面が苦し気に戸口にヌッと出現する、あたり近所は狭苦しきばかり也、この会見の栄を肩身狭くも双肩に荷(にな)える余に向って婆さんは媾和(こうわ)条件の第一款として命令的に左のごとく申し渡した、

自転車に御乗んなさい

ああ悲いかなこの自転車事件たるや、余はついに婆さんの命に従って自転車に乗るべく否自転車より落るべく「ラヴェンダー・ヒル」へと参らざるべからざる不運に際会せり、監督兼教師は○○氏なり、悄然（しょうぜん）たる余を従えて自転車屋へと飛び込みたる彼はまず女乗の手頃なる奴（やつ）を撰（えら）んでこれがよかろうと云う、その理由いかにと尋ぬるに初学入門の捷径（しょうけい）はこれに限るよと降参人と見てとっていやに軽蔑（けいべつ）した文句を並べる、不肖（ふしょう）なりといえども軽少ながら鼻下に髯（ひげ）を蓄えたる男子に女の自転車で稽古（けいこ）をしろとは情ない、まあ落ちて

も善いから当り前の奴でやってみようと抗議を申し込む、もし採用されなかったら丈夫玉砕瓦全を恥ずとか何とか珍汾漢(ちんぷんかん)の気燄(きえん)を吐こうと暗に下拵(したごしらえ)に黙っている、とそれならこれにしようと、いとも見苦しかりける男乗をぞあてがいける、思えらく能者筆を択(えら)ばず、どうせ落ちるのだから車の美醜などは構うものかと、あてがわれたる車を重そうに引張り出す、不平なるは力を出して上からウンと押して見るとギーと鳴る事なり、伏して惟(おもんみ)れば関節が弛(ゆる)んで油気がなくなった老朽の自転車に万里の波濤(はとう)を超(こ)えて遥々(はるばる)と逢いに来たようなものである、自転車屋には恩給年限がないのか知

らんとちょっと不審を起してみる、思うにその年限は疾(と)ッくの昔に来ていて今まで物置の隅(すみ)に閑居静養を専(もっぱ)らにした奴に違ない、計らざりき東洋の孤客に引きずり出され奔命に堪(たえ)ずして悲鳴を上るに至っては自転車の末路また憐(あわれ)むべきものありだがせめては降参の腹癒(はらいせ)にこの老骨をギューと云わしてやらんものをと乗らぬ先から当人はしきりに乗り気になる、然るにハンドルなるもの神経過敏にてこちらへ引けば股にぶつかり、向へ押しやると往来の真中へ馳(か)け出そうとする、乗らぬ内からかくのごとく処置に窮するところをもって見れば乗った後の事は思いやるだに涙の種と知られ

ける、

「どこへ行って乗ろう」「どこだって今日初めて乗るのだからなるたけ人の通らない道の悪くない落ちても人の笑わないようなところに願いたい」と降参人ながらいろいろな条件を提出する、仁恵なる監督官は余が衷情（ちゅうじょう）を憐（あわれ）んで「クラパム・コンモン」の傍人跡あまり繁（しげ）からざる大道の横手馬乗場へと余を拉（らっ）し去る、しかして後「さあここで乗って見たまえ」という、いよいよ降参人の降参人たる本領を発揮せざるを得ざるに至った、ああ悲夫、

乗って見たまえとはすでに知己（ちき）の語にあらず、その

昔本国にあって時めきし時代より天涯(てんがい)万里孤城落日資金窮乏の今日に至るまで人の乗るのを見た事はあるが自分が乗って見たおぼえは毛頭ない、去るを乗って見たまえとはあまり無慈悲なる一言と怒髪鳥打帽を衝(つい)て猛然とハンドルを握ったまではあっぱれ武者(むしゃ)ぶりたのもしかったがいよいよ鞍(くら)に跨(またが)って顧盻(こけい)勇を示す一段になるとおあつらえ通(どお)りに参らない、いざという間際(まぎわ)でずどんと落ること妙なり、自転車は逆立も何もせず至極(しごく)落ちつきはらったものだが乗客だけはまさに鞍壺(くらつぼ)にたまらずずんでん堂とこける、かつて講釈師に聞(きい)た通りを目のあたり自ら実行するとは、あにはからんや、

監督官云う、「初めから腰を据(す)えようなどというのが間違っている、ペダルに足をかけようとしても駄目だよ、ただしがみついて車が一回転でもすれば上出来なんだ」、と心細いこと限りなし、ああ吾事休矣(わがこときゅうす)いくらしがみついても車は半輪転もしないああ吾事休矣としきりに感投詞を繰り返して暗に助勢を嘆願する、かくあらんとは兼て期したる監督官なれば、近く進んでさあ、僕がしっかり抑えているから乗りたまえ、おっとそう真ともに乗っては顚(ひっく)り返る、そら見たまえ、膝を打(うっ)たろう、今度はそーっと尻をかけて両手でここを握って、よしか、僕が前へ押し出すからその勢(いきおい)で調

子に乗って馳(か)け出すんだよ、と怖(こわ)がる者を面白半分前へ突き出す、然るにすべてこれらの準備すべてこれらの労力が突き出される瞬間において砂地に横面を抛(ほう)りつけるための準備にしてかつ労力ならんとは実に神ならぬ身の誰か知るべき底(てい)の驚愕(きょうがく)である。

ちらほら人が立ちどまって見る、にやにや笑って行くものがある、向うの樫(かし)の木の下に乳母(うば)さんが小供をつれてロハ台に腰をかけてさっきからしきりに感服して見ている、何を感服しているのか分らない、おおかた流汗淋漓(りゅうかんりんり)大童(おおわらわ)となって自転車と奮闘しつつある健気(けなげ)な様子に見とれているのだろう、天涯(てんがい)この好知己(こうちき)

を得る以上は向脛（むこうずね）の二三カ所を擦（す）りむいたって惜しくはないという気になる、「もう一遍頼むよ、もっと強く押してくれたまえ、なにまた落ちる？　落ちたって僕の身体（からだ）だよ」と降参人たる資格を忘れてしきりに汗気燄（かんきえん）を吹いている、すると出し抜に後ろから Sir! と呼んだものがある、はてな滅多（めった）な異人に近づきはないはずだがとふり返ると、ちょっと人を狼狽（ろうばい）せしむるに足る的の大巡査がヌーッと立っている、こちらはこんな人に近づきではないが先方ではこのポット出のチンチクリンの田舎者（いなかもの）に近づかざるべからざる理由があってまさに近づいたものと見える、その理由に曰（いわ）く

ここは馬を乗る所で自転車に乗る所ではないから自転車を稽古するなら往来へ出てやらしゃい、オーライ謹んで命を領すと混淆式の答に博学の程度を見せてすぐさまこれを監督官に申出る、と監督官は降参人の今日の凹み加減充分とや思いけん、もう帰ろうじゃないかと云う、すなわち乗れざる自転車と手を携えて帰る、どうでしたと婆さんの問に敗余の意気をもらすらく車嘶いて白日暮れ耳鳴って秋気来るヘン

　忘月忘日　例の自転車を抱いて坂の上に控えたる余は徐ろに眼を放って遥かあなたの下を見廻す、監督官の相図を待って一気にこの坂を馳け下りんとの野心

あればなり、坂の長さ二丁余、傾斜の角度二十度ばかり、路幅十間を超（こ）えて人通多からず、左右はゆかしく住みなせる屋敷ばかりなり、東洋の名士が自転車から落る稽古（けいこ）をすると聞いて英政府が特に土木局に命じてこの道路を作らしめたかどうだかその辺はいまだに判然しないが、とにかく自転車用道路として申分のない場所である、余が監督官は巡査の小言に胆（きも）を冷したものか乃至（ないし）はまた余の車を前へ突き出す労力を省（はぶ）くためか、昨日から人と車を天然自然ところがすべく特にこの地を相し得て余を連れだしたのである、

人の通らない馬車のかよわない時機を見計ったる監

督官はさあ今だ早く乗りたまえという、ただしこの乗るという字に註釈が入る、この字は吾ら両人の間にはいまだ普通の意味に用られていない、わがいわゆる乗るは彼らのいわゆる乗るにあらざるなり、鞍に尻をおろさざるなり、ペダルに足をかけざるなり、ただ力学の原理に依頼して毫も人工を弄せざるの意なり、人をもよけず馬をも避けず水火をも辞せず驀地に前進するの義なり、去るほどにその格好たるやあたかも疝気持が初出に梯子乗を演ずるがごとく、吾ながら乗るという字を濫用してはおらぬかと危ぶむくらいなものである、されども乗るはついに乗るなり、乗らざるにあら

ざるなり、ともかくも人間が自転車に附着している也、しかも一気呵成に附着しているなり、この意味において乗るべく命ぜられたる余は、疾風のごとくに坂の上から転がり出す、すると不思議やな左の方の屋敷の内から拍手して吾が自転行を壮にしたいたずらものがある、妙だなと思う間もなく車はすでに坂の中腹へかかる、今度は大変な物に出逢った、女学生が五十人ばかり行列を整えて向からやってくる、こうなってはいくら女の手前だからと言って気取る訳にもどうする訳にも行かん、両手は塞っている、腰は曲っている、右の足は空を蹴ている、下りようとしても車の方で聞か

ない、絶体絶命しようがないから自家独得の曲乗のままで女軍の傍をからくも通り抜ける。ほっと一息つく間もなく車はすでに坂を下りて平地にあり、けれども毫（ごう）も留まる気色（けしき）がない、しかのみならず向うの四ツ角に立ている巡査の方へ向けてどんどん馳（か）けて行く、気が気でない、今日も巡査に叱られる事かと思いながらもやはり曲乗の姿勢をくずす訳に行かない、自転車は我に無理情死を逼（せま）る勢でむやみに人道の方へ猛進する、とうとう車道から人道へ乗り上げそれでも止まらないで板塀（いたべい）へぶつかって逆戻をする事一間半、危くも巡査を去る三尺の距離でとまった。大分御骨が折れましょ

うと笑ながら査公が申された故、答えて曰くイエス、忘月忘日「……御調べになる時はブリチッシュ・ミュジーアムへ御出かけになりますか」「あすこへはあまり参りません、本へやたらにノートを書きつけたり棒を引いたりする癖があるものですから」「さよう、自分の本の方が自由に使えて善ですね、しかし私などは著作をしようと思うとあすこへ出かけます……」

「夏目さんは大変御勉強だそうですね」と細君が傍から口を開く「あまり勉強もしません、近頃は人から勧められて自転車を始めたものですから、朝から晩までそればかりやっています」「自転車は面白うござんすね、

宅ではみんな乗りますよ、あなたもやはり遠乗をなさいましょう」遠乗をもって細君から擬(ぎ)せられた先生は実に普通の意味において乗るちょう事のいかなるものなるかをさえ解し得ざる男なり、ただ一種の曲解せられたる意味をもって坂の上から坂の下まで辛うじて乗り終(おお)せる男なり、遠乗の二字を承って心安からず思いしが、掛直(かけね)を云うことが第二の天性とまで進化せる二十世紀の今日、この点にかけては一人前に通用する人物なれば、如才なく下のごとく返答をした「さよう遠乗というほどの事もまだしませんが、坂の上から下の方へ勢よく乗りおろす時なんかすこぶる愉快ですね」

今まで沈黙を守っておった令嬢はこいつ少しは乗きるなと疳違（かんちがい）をしたものと見えて「いつか夏目さんといっしょに皆でウィンブルドンへでも行ったらどうでしょう」と父君と母上に向って動議を提出する、父君と母上は一斉に余が顔を見る、余ここにおいてか少々尻こそばゆき状態に陥るのやむをえざるに至れり、さりながら妙齢なる美人より申し込まれたるこの果し状を真平御免蒙（まっぴらごめんこうむ）ると握りつぶす訳には行かない、いやしくも文明の教育を受けたる紳士が婦人に対する尊敬を失しては生涯（しょうがい）の不面目だし、かつやこれでもかこれでもかと余が咽喉（のど）を扼（やく）しつつある二寸五分のハイカラ

の手前もある事だから、ことさらに平気と愉快を等分に加味した顔をして「それは面白いでしょうしかし……」「御勉強で御忙しいでしょうが今度の土曜ぐらいは御閑(おひま)でいらっしゃいましょう」とだんだん切り込んでくる、余が「しかし……」の後には必ずしも多忙が来ると限っておらない、自分ながら何のための「しかし」だかまだ判然せざるうちにこう先(せん)を越されてはいよいよ「しかし」の納り場がなくなる、「しかしあまり人通りの多い所ではエー……アノーまだ練(な)れませんから」とようやく一方の活路を開くや否や「いえ、あの辺の道路は実に閑静なものですよ」とすぐ通せん坊を

される、進退これきわまるとは啻に自転車の上のみにてはあらざりけり、と独りで感心をしている、感心したばかりでは埒があかないから、この際唯一の手段として「しかし」をもう一遍繰り返す「しかし……今度の土曜は天気でしょうか」旗幟の鮮明ならざること夥しい誰に聞いたって、そんな事が分るものか、さてもこの勝負男の方負とや見たりけん、審判官たる主人は仲裁乎として口を開いて曰く、日はきめんでもいずれそのうち私が自転車で御宅へ伺いましょう、そしていっしょに散歩でもしましょう、——サイクリストに向っていっしょに散歩でもしましょうとはこれいか

に、彼は余を目してサイクリストたるの資格なきものと認定せるなり

　このうつくしき令嬢と「ウィンブルドン」に行かなかったのは余の幸であるかはた不幸であるか、考うること四十八時間ついに判然しなかった、日本派の俳諧師（はいかいし）これを称して朦朧体（もうろうたい）という

　忘月忘日　数日来の手痛き経験と精緻（せいち）なる思索とによって余は下の結論に到着した

　自転車の鞍（くら）とペダルとは何も世間体を繕（つくろ）うために漫然と附着しているものではない、鞍は尻をかけるための鞍にしてペダルは足を載せかつ踏みつ

けると回転するためのペダルなり、ハンドルはもっとも危険の道具にして、一度(ひとた)びこれを握るときは人目を眩(くらま)せしむるに足る目勇(めざま)しき働きをなすものなり

かく漆桶(しっとう)を抜くがごとく自転悟を開きたる余は今例の監督官及びその友なる貴公子某伯爵と共に鑣(くつわ)を連(つら)ねて「クラパムコンモン」を横ぎり鉄道馬車の通う大通りへ曲らんとするところだと思いたまえ、余の車は両君の間に介在して操縦すでに自由ならず、ただ前へ出られるばかりと思いたまえ、しかるに出られべき一方口が突然塞(ふさが)ったと思いたまえ、すなわち横ぎりに

かかる塗炭（とたん）に右の方より不都合なる一輛（いちりょう）の荷車が御免（ごめん）よとも何とも云わず傲然（ごうぜん）として我前を通ったのさ、今までの態度を維持すれば衝突するばかりだろう、余の主義として衝突はこちらが勝つ場合についてのみあえてするが、その他負色の見えすいたような衝突になるといつでも御免蒙るのが吾家伝来の憲法である、さるによってこの尨大（ぼうだい）なる荷車と老朽悲鳴をあげるほどの吾が自転車との衝突は、おやじの遺言としても避けねばならぬ、と云って左右へよけようとすると御両君のうちいずれへか衝突の尻をもって行かねばならん、もったいなくも一人は伯爵の若殿様で、一人は吾が恩

師である、さような無礼な事は平民たる我々風情（ふぜい）のすまじき事である、のみならず捕虜の分際として推参な所作と思わるべし、孝ならんと欲すれば礼ならず、礼ならんと欲すれば孝ならず、やむなくんば退却か落車の二あるのみと、ちょっとの間に相場がきまってしまった、この時事に臨んでかつて狼狽（ろうばい）したる事なきわれつらつら思うよう、できさえすれば退却も満更（まんざら）でない、少なくとも落車に優（まさ）ること万々なりといえども、悲夫逆艪（さかろ）の用意いまだ調（ととの）わざる今日の時勢なれば、エー仕方がない思い切って落車にしろ、と両車の間に堂と落つ、折しも余を去る事二間ばかりのところに退

屈そうに立っていた巡査——自転車の巡査におけるそれなお刺身のツマにおけるがごときか、何ぞそれ引き合に出るのははなはだしき——このツマ的巡査が声を揚げてアハ、アハ、アハ、と三度笑った。その笑い方苦笑にあらず、冷笑にあらず、微笑にあらず、カンラカラカラ笑にあらず、全くの作り笑なり、人から頼まれてする依托笑なり、この依托笑をするためにこの巡査はシックスペンスを得たか、ワン・シリングを得たか、遺憾（いかん）ながらこれを考究する暇がなかった、

　へんツマ巡査などが笑ったってとすぐさま御両君の後を慕って馳（か）け出す、これが巡公でなくって先日の御

娘さんだったらやはりすぐさま馳け出されるかどうだかの問題はいざとならなければ解釈がつかないから質問しない方がいいとして先へ進む、　さて両君はこの辺の地理不案内なりとの口実をもって覚束(おぼつか)なき余に先導たるべしとの厳命を伝えた、　しかるに案内には詳(くわ)しいが自転車には毫(ごう)も詳しくないから、　行こうと思う方へは行かないで曲り角へくるとただ曲りやすい方へ曲ってしまう、　ここにおいてか同じ所へ何返(なんべん)も出て来る、　始めの内は何とかかんとかごまかしていたが、　そうは持ち切れるものでない、　今度は違った方へ行こうとの御意である、　よろしいと口には云ったようなものの、

ままにならぬは浮世の習、容易にそっちの方角へ曲らない、道幅三分の二も来た頃、やっとの思でハンドルをギューッと捩（ねじ）ったら、自転車は九十度の角度を一どきに廻ってしまった、その急廻転のために思いがけなき功名を博し得たと云う御話しは、明日の前講になかという価値もないから、すぐ話してしまう、この時まで気がつかなかったがこの急劇なる方向転換の刹那（せつな）に余と同じ方角へ向けて余に尾行して来た一人のサイクリストがあった、ところがこの不意撃（ふいうち）に驚いて車をかわす暇もなくもろくも余の傍で転がり落ちた、後で聞けば、四ツ角を曲る時にはベルを鳴すか片手をあげる

か一通りの挨拶（あいさつ）をするのが礼だそうだが、落天の奇想を好む余はさような月並主義を採（と）らない、いわんやベルを鳴したり手を挙（あ）げたり、そんな面倒な事をする余裕はこの際少しもなきにおいてをやだ、ここにおいてかこのダンマリ転換を遂行するのも余にとっては万やむをえざるに出たもので、余のあとにくっついて来た男が吃驚（びっくり）して落車したのもまた無理のないところである、双方共無理のないところであるから不思議はない、当然の事であるが、西洋人の論理はこれほどまで発達しておらんと見えて、彼の落ち人大（おおい）に逆鱗（げきりん）の体で、チンチンチャイナマンと余を罵（ののし）った、罵られたる余は

一矢酬（いっしむく）ゆるはずであるが、そこは大悠（だいゆう）なる豪傑の本性をあらわして、御気の毒だねの一言を遺（のこ）してふり向もせずに曲って行く、実はふり向こうとするうちに車が通り過ぎたのである、「御気の毒だね」よりほかの語が出て来なかったのである、正直なる余は苟且（こうしょ）にも豪傑など云う、一種の曲者と間違らるるを恐れて、ここにゆっくり弁解しておくなり、万一余を豪傑だなどと買被（かいかぶ）って失敬な挙動あるにおいては七生まで祟（たた）るかも知れない、

　忘月忘日　人間万事漱石の自転車で、自分が落ちるかと思うと人を落す事もある、そんなに落胆したもの

でもないと、今日はズーズーしく構えて、バタシー公園へと急ぐ、公園はすこぶる閑静だが、その手前三丁ばかりのところが非常の雑沓（ざっとう）な通りで、初学者たる余にとっては難透難徹の難関である、今しも余の自転車は「ラヴェンダー」坂を無難に通り抜けて、この四通八達の中央へと乗り出す、向うに鉄道馬車が一台こちらを向いて休んでいる、その右側に非常に大なる荷車が向うむきに休んでいる、その間約四尺ばかり、余はこの四尺の間をすり抜けるべく車を走らしたのである、余が車の前輪が馬車馬の前足と並んだ時、すなわち余の身体（からだ）が鉄道馬車と荷車との間に這入（はい）りかけた時、一

台の自転車が疾風のごとく向（むこう）から割り込んで来た、かようなとっさの際には命が大事だから退却にしようか落車にしようかなどの分別は、さすがの吾輩にも出なかったと見えて、おやと思ったら身体はもう落ちておった、落方が少々まずかったので、落る時左の手でしたたか馬の太腹を叩（たた）いて、からくも四這（よつばい）の不体裁を免（まぬ）がれた、やれうれしやと思う間もなく鉄道馬車は前進し始める、馬は驚ろいて吾輩の自転車を蹴飛（けとば）す、相手の自転車は何喰わぬ顔ですうと抜けて行く、間（ま）の抜（ぬけ）さ加減は尋常一様にあらず、この時派出（はで）やかなるギグに乗って後ろから馳（か）け来（きた）りたる一個の紳士、策（むち）を揚（あ）げ

ざまに余が方を顧（かえり）みて曰（いわ）く大丈夫だ安心したまえ、殺しやしないのだからと、余心中ひそかに驚いて云う、して見ると時には自転車に乗せて殺してしまうのがあるのかしらん英国は険呑（けんのん）な所だと

*　*　*

余が廿貫目の婆さんに降参して自転車責に遇（あ）ってより以来、大落五度小落はその数を知らず、或時は石垣にぶつかって向脛（むこうずね）を擦（す）りむき、或る時は立木に突き

当って生爪（なまづめ）を剥（は）がす、その苦戦云うばかりなし、しかしてついに物にならざるなり、元来この二十貫目の婆さんはむやみに人を馬鹿にする婆さんにして、この婆さんが皮肉に人を馬鹿にする時、その妹の十一貫目の婆さんは、瞬（また）きもせず余が黄色な面を打守りていかなる変化が余の眉目（びもく）の間（かん）に現るるかを検査する役目を務める、御役目御苦労の至りだ、この二婆さんの呵責（かしゃく）に逢（あ）てより以来、余が猜疑心（さいぎしん）はますます深くなり、余が継子根性（ままここんじょう）は日に日に増長し、ついには明け放しの門戸を閉鎖して我黄色な顔をいよいよ黄色にするのやむをえざるに至れり、彼二婆さんは余が黄色の深浅を

測(はか)って彼ら一日のプログラムを定める、余は実に彼らにとって黄色な活動晴雨計であった、たまた※［＃小書き片仮名マ、695-8］降参を申し込んで羸(あま)し得たるところ若干(いくばく)ぞと問えば、貴重な留学時間を浪費して下宿の飯を二人前食いしに過ぎず、さればこの降参は我に益なくして彼に損ありしものと思惟(しい)す、無残なるかな、

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８８（昭和63）年７月26日第１刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年４月～１９７２（昭和47）年１月
入力：柴田卓治
校正：大野晋
１９９９年10月29日公開
２００４年２月26日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。